

ニ地藏并テ年來念ジ奉ル力也トナム、語リ傳ヘタルトヤ、

〔吾妻鏡 十九〕承元二年九月三日庚子熊谷小次郎直家上洛、是父入道直實來十四日於東山麓、可

執終之由示下之間、爲見訪之云云、進發之後、此事披露于御所中、珍事之由、有其沙汰、而廣元朝臣云、

兼知死期非權化者、雖似有疑、彼入道遁世塵之後、欣求淨土、所願堅固、積念佛修行薰修、仰而可信歟

云云、十月廿一日丁亥、東平太重胤號東所遂先途自京都歸參、即被召御所、申洛中事等、先熊谷二

郎直實入道、以九月十四日未剋、可爲終焉之期由、相觸之間、至當日結緣道俗、圍繞彼東山草庵、時剋

著衣袈裟昇禮盤、端座合掌唱高聲念佛執終、兼聊無病氣云云、

〔古今著聞集 哀傷 十三〕從二位家隆卿はわかより後世のつとめなかりけるが、嘉禎二年十二月廿三

日、病におかされて出家、略四月元安貞八日、宿執や催されけん、七首の和歌を詠せられける、略歌

略かくて九日、かねて其期を知て、酉刻に端居合掌して終られにけり、本尊をも安置せざりけり、

只今生身の佛來迎し給はずんば、本尊よしなしとぞいはれけり、

〔續近世叢語 衛七解〕川谷貞六一日仰見天象、俄會族人曰、後日曉、自公召余問天學事畢、余出城、必死于

某所矣、請各來待于此、乃命酒爲訣、至期、天未明、侯召貞六、貞六卯牌入見、未牌半刻罷、乘轎出城、可十

町、即死、皆如其言、

川谷貞六、仕土佐侯、精研天文之學、旁攻吾邦神道云、

〔下學集〕臨終

〔倭訓栞 利中編 二十八〕りんじゆう 臨終の音なり

〔倭訓栞 伊中編 二〕いまはのとき 死せんとする時をいへり、いまはのきはとも見えたり、

〔源氏物語 桐一壺〕故大納言いまはとなるまで、たゞ此人の宮づかへのほい、がならずとげさせたて

まつれ略中など、返々いさめをかれ侍しかば、略下

臨終